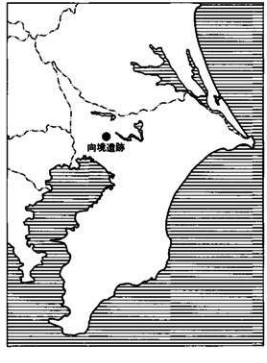
千葉県文化財センター調査報告第346集

八千代市向境遺跡

－県単交通安全対策事業（千葉竜ケ崎線）埋蔵文化財調査報告書－



平成10年 8 月

千　葉　県　土　木　部

財団法人　千葉県文化財センター

序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第346集として、千葉県土木部道路維持課の県単交通安全対策事業（千葉竜ケ崎線）に伴って実施した、八千代市向境遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代の竪穴住居跡が発見されるなど、この地域の古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年8月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中村　好成

凡　例

1　本書は千葉県土木部による県単交通安全対策事業（千葉竜ケ崎線）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県八千代市神野北ノ台1158－12に所在する向境遺跡（遺跡コード221－023）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　平成７年度の発掘調査及び整理作業は、印西調査事務所長　谷旬の指導のもと、研究員　猪股昭喜が実施し、平成10年度の整理作業は北部調査事務所長　折原繁の指導のもと、副所長　加藤修司がそれぞれ下記の期間に実施した。

発掘調査　平成７年10月２日～平成７年10月19日
整理作業　平成７年10月22日～平成７年10月31日
　　平成10年６月１日～平成10年６月30日

5　本書の執筆は副所長　加藤修司が行った。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路維持課、千葉県千葉土木事務所、八千代市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行

１／25,000地形図「小林」「佐倉」「白井」「習志野」（Ｎ１－54－19－14－１、２、３、４）

8　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

9　本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査の概要……1
　2　遺跡の位置と環境……2
Ⅱ　検出した遺構・遺物……3
　1　基本層序……3
　2　縄文、弥生時代の遺物……4
　3　古墳時代以降の遺構と遺物……4
Ⅲ　まとめ……6

挿図目次

第1図　事業範囲と調査範囲……1
第2図　向境遺跡周辺と遺跡（一部）と地形……2
第3図　基本層序……3
第4図　縄文・弥生土器拓影……5
第5図　遺構全体図……6
第6図　1号住居跡と出土土器……7
第7図　1号溝、2号溝、1号道跡……7

図版目次

図版1　1号住居跡、1号溝
図版2　2号溝、1号道跡
図版3　縄文土器
図版4　弥生土器と1号住居跡出土土器

Ⅰ　はじめに

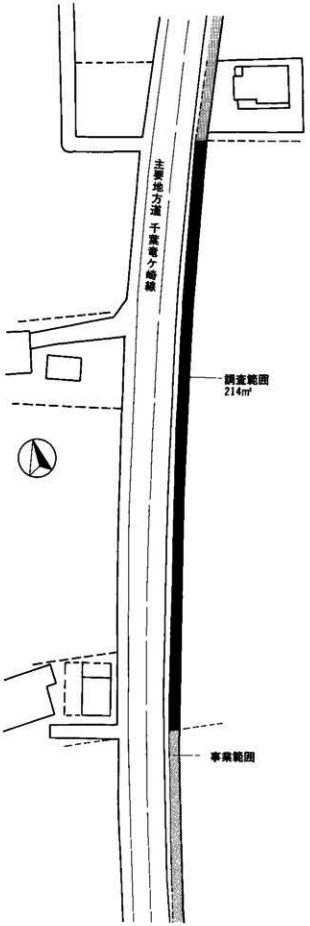
1　調査の概要（第１図）

（１）調査の経緯と経過

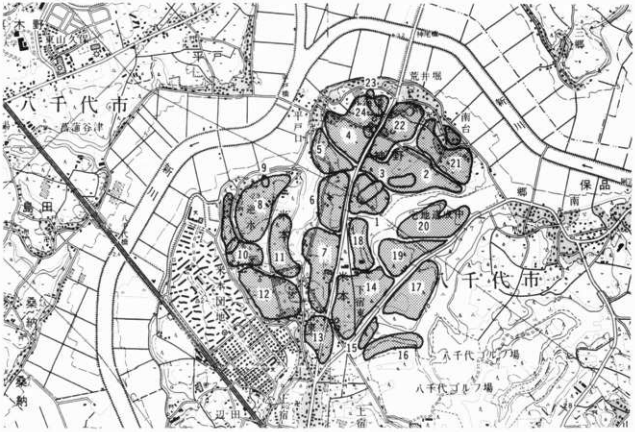
千葉県土木部道路維持課は、県道千葉竜ケ崎線の八千代市米本地先において、県単交通安全対策事業（歩道の整備）を実施することとなった。このため、平成６年、千葉県千葉土木事務所から事業地内における埋蔵文化財の所在の有無について、千葉県教育委員会に照会がなされ、これを受けて現地を踏査した結果、事業地の一部については周知の「向境遺跡」に含まれることが判明し、その旨を回答した。協議の結果、遺跡部分については記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。調査は当初、150m²について平成７年９月１日から開始する予定であったが、その後、周辺遺跡の状況から判断して、一部の事業地が新たに調査対象範囲に加えられ、合計214m²を同年10月２日から開始することとなった。調査の完了は同年10月19日となった。

（２）調査の方法

調査地区は幅約２m、長さ約110mと極めて細長い。また、周辺は遺構密度の高い遺跡が多いため、確認調査を省略し、ただちに上層全域の本調査を開始した。表土除去にはバックホウを用い、遺構確認面（関東ローム層上面）まで掘り下げた。排土は事業地外に搬出できないため、調査未着手地域に仮置きする、いわゆるスイッチバック方式で行った。検出された遺構や遺物は、公共座標を基準にして標高及び平面位置を記録した。



第１図　事業範囲と調査範囲（S＝1/500）



1．向境遺跡　2．境堀遺跡　3．神野群集塚　4．神野芝山遺跡　5．平戸口遺跡　6．役山遺跡
7．鳥ノ塚遺跡　8．逆水遺跡　9．逆水北塚群　10．逆水塚群　11．鳥ケ谷遺跡　12．大山遺跡
13．下宿東遺跡　14．雷遺跡　15．雷南遺跡　16．向割遺跡　17．上谷遺跡　18．役山東遺跡
19．保品栗谷古墳　20．栗谷遺跡　21．南合遺跡　22．神野貝塚　23．神野芝山古墳群　24．神野新山塚群

第2図　向境遺跡周辺の遺跡(一部)と地形（S＝1/25,000）

2　遺跡の位置と環境（第2図）

向境遺跡（1）が位置する八千代市北東部地区は、標高約20m～25mであり、比較的平坦な台地と高低差の少ない緩やかな斜面が形成されている。新川を通じて印旛沼への水利にも恵まれているが、縄文時代前期ごろまでは、印旛沼は外洋と通じた古環境（奥鬼怒湾）であったことが推察されている。縄文時代中期から後期にかけて、当地域でも神野（かの）貝塚（22）はじめいくつかの貝塚が作られたが、主淡系であり[1]、このころには海退等による印旛沼の形成が行われていたと考えられる。このように水利に恵まれた環境と地形ゆえ、当地域は各時代の遺跡の分布密度が極めて高い。第2図にあるように、向境遺跡周辺は、谷津部分を除くと集落跡、貝塚、古墳、塚等が密集している。神野芝山古墳群（23）は1972年に調査され、1号墳（円墳）から人骨10体、4号墳からは石枕が出土し注目された[2]。保品栗谷古墳（19）は、古く1951年に早稲田大学により調査され、箱式石棺を伴う円墳から直刀、刀子ほか多くの玉類が出土している[3]。

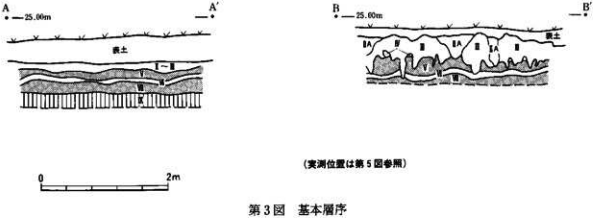
向境遺跡をはじめ、境堀遺跡（2）、栗谷遺跡（20）、上谷遺跡（17）、役山東遺跡（18）、雷遺跡（14）神野群集塚（3）は、昭和63年3月から八千代市教育委員会により、当地区の大学造成及び住宅地造成開発事業に伴い発掘調査が実施された。縄文時代早期から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世に至るまで、多くの遺構・遺物が検出されている[4]。現地見学会の資料によれば、向境、境堀両遺跡からは縄文時代早期炉穴、弥生時代後期竪穴住居跡、方形周溝墓、古墳時代前期竪穴住居跡、平安時代竪穴住居跡等が数多く検出されている。栗谷遺跡では、縄文時代早期の炉穴群のほか、弥生時代後期の方形周溝墓群と住居跡群が分離した状態で検出され、上谷遺跡では弥生時代から平安時代にかけての継続的な集落跡が、神野群集塚では中世の塚38基が確認されている。雷遺跡、雷南遺跡（15）は千葉竜ケ崎線の住宅宅地関連事業に伴う改築工事により、当センターが平成9年度に調査を実施し、現在、整理、報告書刊行中である。

注1　園生貝塚研究会　1997　「神野貝塚の基礎的研究」『貝塚研究』
　2　千葉県立八千代高校史学会　1972　『史学報第3号』
　3　早稲田大学考古学会　1968　「千葉県印旛郡阿蘇村栗谷古墳」『古代11号』
　4　八千代市教育委員会　1995　『向境・境堀遺跡見学会資料』

II　検出した遺構・遺物

1　基本層序（第3図）

調査区のほぼ中央付近（A～A′）と南側（B～B′）の2地点で土層の観察を行った。中央付近は南側に比べ、標高がやや低くなっており、流れ込んだ表土が40cm～50cm堆積している。両地点とも、IV層の確認が極めて難しく、III層下は第1黒色帯（V層）となる。V層は中央付近では厚さが20cm程度であるが、南側では40cm以上の厚みとなっている。VI層はＡＴ（姶良丹沢パミス）を包含する層で、両地点とも標高約24mのところで10cmほどの厚さで堆積している。VII層は第2黒色帯上半部である。IX層の細分はできないが、第2黒色帯の下半部の一部と考えられる。



第3図　基本層序

2　縄文、弥生時代の遺物（第４図）（図版３、４）

縄文、弥生時代の遺構の検出はない。遺物はいずれも土器片で、住居跡や溝の覆土から出土した。１は１号住居跡出土で、半載竹管による沈線に沿って、細い竹管による刺突文が巡っている。頸部から「く」の字に強く屈曲する形状の鉢で、五領ケ台Ⅰ式と思われる。胎土には砂を多く含み、薄い赤茶色を呈している。２も１号住居跡出土で、３条の沈線が２段見られるが、いずれも半載竹管による平行沈線の中央に棒状沈線を加えた構造である。沈線の内側には交互刺突による連続「コ」の字状文が見られ、五領ケ台Ⅱ式と思われる。胎土は密で堅致な焼成である。３は１号溝出土で、沈線に沿って竹管による斜め方向の連続刺突文が見られる。１、２と同様に五領ケ台式と思われるが細片であり断定はできない。４は加曽利ＥⅢ式と思われる。１号住居跡出土で胎土にやや砂が多く混じる。粗いＬＲ単節縄文が斜位の沈線で区切られている。５～７はいずれも加曽利Ｂ式である。５は粗く浅い条線が引かれ、胎土は密で焼成は良好である。６、７は１号溝出土で、口唇部から下方に縦位の条線が引かれ、７は横位の条線で区切られている。胎土は密で焼成は良好である。８は５～７に比べ条線が浅く加曽利Ｂ式と思われる。９から15は後期弥生土器と思われる。ただし、９は、胎土に多くの石を含み、焼成も不良で粗い結節文は10、12とは異質の感がある。結節文はＳ字を呈し、ＲＬ単節縄文が連続している。10は「Ｚ」字の結節文と思われ、ＬＲ単節縄文が見られる。これに対し12はＳ字結節、ＲＬ単節縄文である。13から15のＬＲ単節縄文を含め、以上はいずれも南関東地域の後期弥生土器に共通する文様構成である。一方、11は附加状縄文であり、型式的には区分されるべきものである。

3　古墳時代以降の遺構と遺物（第５図～第９図）（図版１、２、４）

（１）１号住居跡

古墳時代以降に属する遺構がいくつか検出されているが、時期が断定できるものは１号住居跡のみである。覆土は自然堆積で、１はⅡＡ層が流れ込んでいる。２は細かなローム粒が多く混じる褐色土層で３は壁の崩壊に伴うロームブロックを多く含む層である。主軸は推定でＮ－25°－Ｗである。住居跡の規模は不明であるが、大形で主柱穴、貯蔵穴を有している。床面に山砂、粘土塊が少量見られていることからカマドは存在していたと思われる。主柱穴の深さは約65cm、貯蔵穴は約40cmといずれも深い。床面硬化面は明瞭には検出されていないが、床全域にわたり平坦で良好な面を呈している。

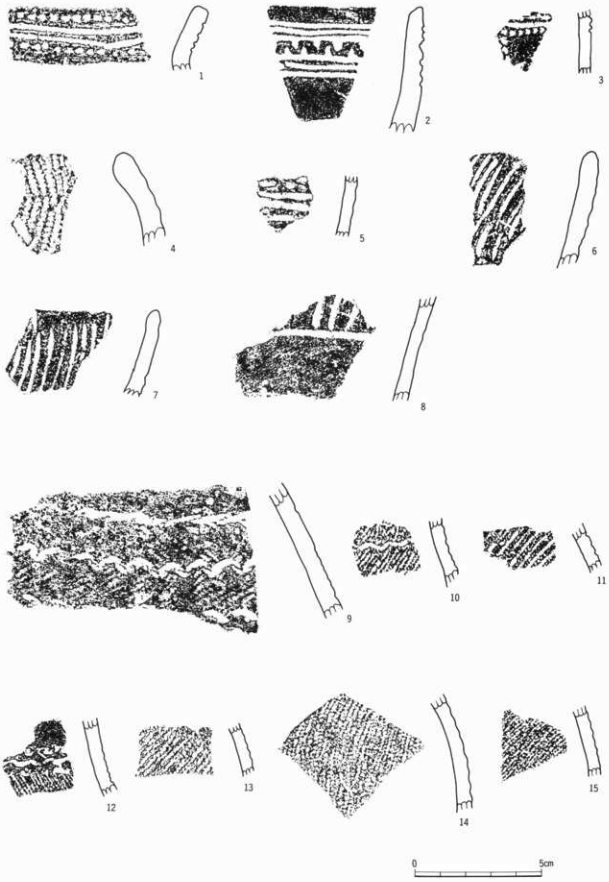
１は推定口径12cmの小形の甕、もしくは鉢である。口縁部が小さく外反し、内外面ともヘラ削りが施されている。２は坏であるが口径等は不明である。口縁部がつまみ上げられる形状を呈しており、底部は丸底であったと思われる。外面はヘラ削りのままであるが、内面はヘラ磨きが加えられ、さらに赤彩が施されている。

（２）１号溝

ほぼ東西に走り、幅約1.8m、深さ約45cmを測る。底面はほぼ水平、平坦であるが軟弱である。覆土は自然堆積で１は表土層、２はローム層を含む褐色土層でほぼ水平堆積である。３は黒色土ブロックである。４は２を基調にしているが腐植土が混じり、黒色が強い。５はロームブロックである。６はローム層を多く含む粘質土である。覆土の状況を見ると、２の水平堆積は溝が埋まりきる最後の段階での堆積形状と言え、言い換えれば溝本来の構造上の深さがそのまま残されていたと思われる。

（３）２号溝

ほぼ東西に走るが１号溝よりやや南寄りにずれている。幅約80cm、深さ約20cmを測る。底面はほぼ水平、



第4図　縄文・弥生土器拓影（S＝2/3）

平坦であるが軟弱である。覆土は1は表土層、2はⅡA層が流れ込んだもので3はⅢ層（4）ブロックである。遺構検出面はⅢ層である。西側底面に小穴が複数検出されている。深さは約10cmである。

（4）1号道跡

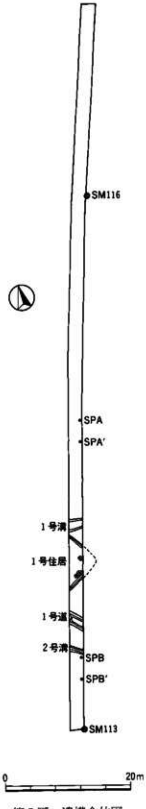
2号溝にほぼ平行して北側に検出された。幅約2m、深さ約50cmを測る。浅い（約7cm）側溝が伴い、底面がほぼ水平で明瞭な硬化面を有することから道跡と断定した。覆土は1は表土層、2は黒色土ブロック、3はローム層を含む褐色粘性土、4はⅡA層が流れ込んだものである。5がⅢ層であり、道の深さは本来5層上面まであったようである。そうであれば推定70cmを測る。

Ⅲ　まとめ

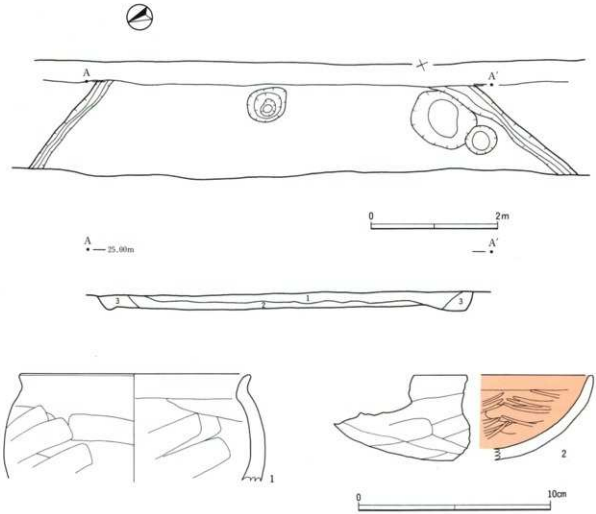
向境遺跡周辺は冒頭で述べたとおり、遺跡が密集している地域であり、複数の時代の遺構、遺物が発見されている。今回の調査でも、古墳時代の竪穴住居跡の覆土内から各時期の土器が出土しており、表土内にもそうした細片が混在している。当地域は縄文時代早期に多くの炉穴群が形成されており、狩猟の場として確立していたようである。その後、中期以降も神野貝塚に代表されるように、印旛沼の水利を求めた人々が継続的に居住していたと考えられる。弥生時代になり、いわゆる南関東系の土器とともに、利根川以北の影響を受けた土器ももたらされ、印旛沼周辺では複雑な土器型式が発生したことは周知のとおりである。今回の調査でも、細かな土器片の文様にも両系統の要素が看取されている。

古墳時代の遺構としては竪穴住居跡（1号住居跡）が検出されたが、柱穴から判断してかなりの規模を有していたと考えられる。いわゆる鬼高期の大形住居と断定したい。出土した土器はわずかであるが、小さく外反する口縁部の鉢や埦状の赤彩坏は、既成の研究成果においては、体部に明瞭な稜線をもつ坏出現以前の型式とされ、鬼高期でも古い様相であることは間違いない。また、表土及び覆土内に須恵器の細片も見いだせない事実は、時期的な問題であるかもしれない。そうであるならば、当地の特徴として6世紀においてもかなり古い時期を考えるべきかもしれない。いずれにしても、資料的に断片的であるため全容は明らかにできないが、八千代市で調査を実施してきた向境遺跡の古墳時代遺構が、前期（五領期）が主体であるのに対して異質の感は否めない。

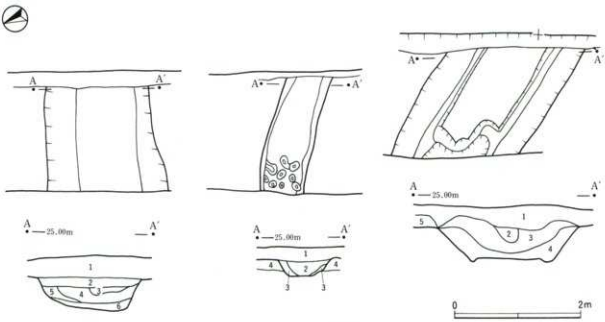
1号溝や1号道跡は1号住居跡を切断していると考えられ、より新しい時期の所産である。現在の畑の地割り方向ともほぼ一致しており、農耕に関する遺構であると考えておきたい。



第5図　遺構全体図



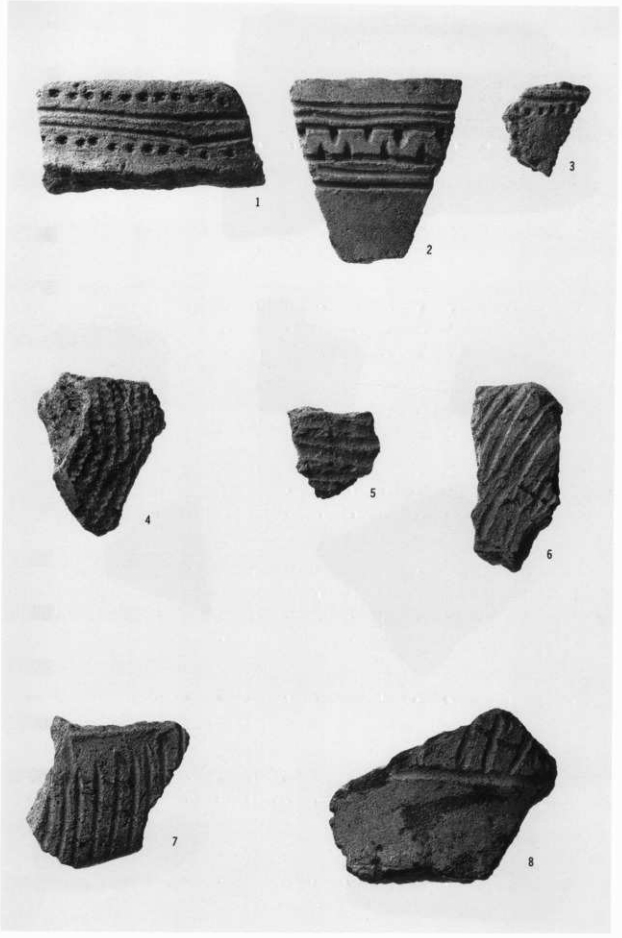
第6図　1号住居跡と出土土器



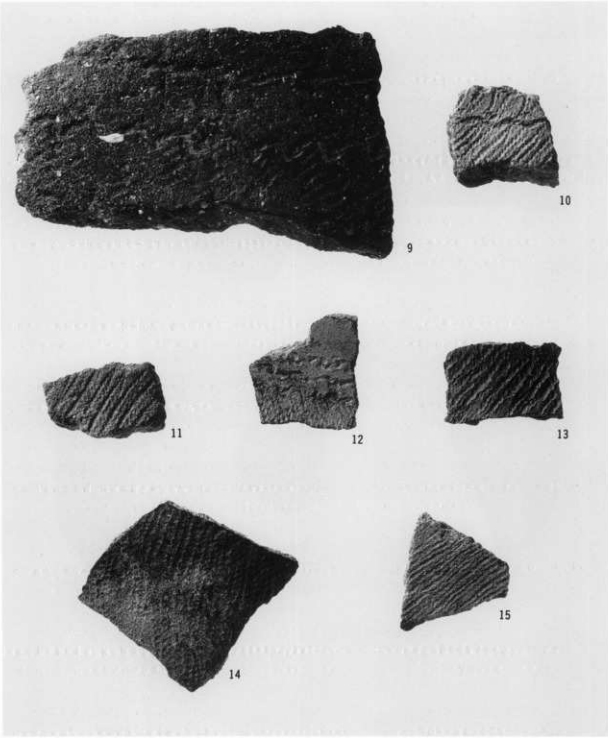
第7図　1号溝(左)、2号溝(中)　1号道跡

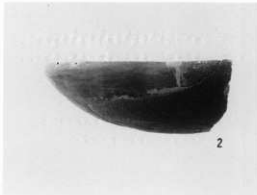
1 号住居跡(上)　1 号溝(下)

2 号溝(上)　1 号道跡(下)



縄文土器(原寸)





弥生土器(上)(原寸)と1号住居跡出土土器(下)(S＝1/2)

報告書抄録

ふりがな	やちよしむかいさかいいせき
書名	八千代市向境遺跡
副書名	県単交通安全対策事業（千葉竜ケ崎線）埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第346集
編著者名	加藤修司
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　☎043-422-8811
発行年月日	西暦1998年8月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
向境（むかいさかい）	千葉県八千代市（ちばけんやちよし） 神野北ノ台（かのきたのだい） 1158番地12号	221	023	35度 45分 40秒	140度 7分 40秒	19951002 ～ 19951019	214	交通安全施設 整備に伴う埋 蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向境	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡　1軒	土師器	
		中世	溝　2条		
			道路状遺構　1状		

千葉県文化財センター調査報告第346集

八千代市向境遺跡

県単交通安全対策事業（千葉竜ケ崎線）埋蔵文化財調査報告書

平成10年8月31日

編集　財団法人　千葉県文化財センター

発行　千葉県土木部

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町2-5-5